他称ビッチは恋に乱れる!?

目次

他称ビッチは恋に乱れる!? 5
番外編　ほろよい 317

他称ビッチは恋に乱れる!?

1、他称ビッチ、流される

なんか軽そう、それがおれの第一印象らしい。
中学生の頃からずっと、やれ誰それをもてあそんだだの、片手で収まらないくらいの彼女がいるだの、全員遊びで本命はいないだの、軽薄な噂がつきまとう。
それが嫌で高校は男子校を選んだら、今度はビッチとかいうあだ名までついた。
大学二年の今も呼ばれているから、もう四年強。不本意ながら長く付き合っているあだ名だけど、ちょっと言ってもいいだろうか。
――ヤリチンならまだしも、ビッチってなんだビッチって！
頼めばヤラせてくれるとか、一回いくらだとか、最高で三人までなら同時にいけるとか。
悪いがこちとら、キスさえ知らない清い身体だ！
当然童貞。もちろん処女！
男なのに処女ってなんだよ！
百歩譲って、女に飢えた男子校特有のノリだとしよう。
姫なんて呼ばれているやつもいたし、実際にカップルだって成立していた。女と縁がなさすぎて、

手近にいる男を女扱いするのもよく聞く話だ。
その流れで行くと、おれがビッチなんて不名誉なあだ名で呼ばれるのもわからんでもない。
でも、ちょっと、もう一回叫んでもいいだろうか。
――な、ん、で、大学でもビッチ扱いなんだよ！
身に覚えのない痴話喧嘩（ちわげんか）に巻き込まれるし！　学祭で浮かれたやつに襲われかけるし！
ちょっと飯行こうぜ、ってくらいの気軽さで、性的に誘われるのはなんでなんだよ！
「なあ相原（あいはら）、一回でいいからヤらせろよ」
「あー、今そういう気分じゃないんで」
しつこい誘いにイラッとしつつも、それを隠してへらりと笑う。
入学したときから頻繁に声をかけてくる先輩。男。名前は知らない。
知っているのは、やたらとギラついた目をしていることと、うざいことと、しつこいことだけ。
何度断られても誘い続けるなんて、よっぽどモテないんだと思うけど――もしかして、このやんわりとした断り方がよくないんだろうか？
今はそういう気分じゃなくても、ビッチだしいつかはヤれんだろ、って思われているとか？
だからおれと顔を合わせるたびに、しつこいくらいに誘ってくるのか？
うわぁ、ありそう、とげんなりしつつ、落ちかかる髪を耳にかけた。
ゆるくウェーブした髪は染めていないのに茶色くて、肌はゆでたまごみたいにつるりと白い。
骨格は細く頼りなくて、それなりに整った顔は中性的……と主張したいけど、残念ながら女顔。

でも、アクセサリーはかゆくなるからつけないし、断じてチャラついた格好もしていない。
もちろんビッチだと誤解されるようなこともしていない。
それなのにビッチの汚名がつきまとうのはなぜなのか。
いい加減、汚名返上したいんだけど。
「いっつもそれだな。ビッチのくせに」
「こう見えて案外純情なんすよ」
「金か？　いくらだ？」
スルーかー。そうかー。そんなことだろうと思ったよ。
「おれは見た目に反して軽くないし、なんなら貞操観念だって強いほうだ」なんて言っても、誰も信じないよなあ。
高校生の頃、見た目で誤解されるならイメージを変えるしかないと、頑張ってみたことがある。
でも、筋トレはかえって華奢になっただけだったし、長めの髪をばっさり切ったら、うなじがソソると言われまくった。
おれの背後に忍び寄って、気づかれないうちにうなじを撫でるっていう遊びが流行った。
それからは誤解を解くのを諦めて、長い髪も伸ばしっぱなしだ。
昔から美容院は好きじゃないし、どうせ軽く見られるなら、人に頭を触られる回数が少ないほうがいい。
頭に限った話じゃないけど、人に触られるとぞわっとするから嫌なんだって。

これもビッチっぽくないからか、誰にも信じてもらえないんだけどさ。
――でも、こうして誘いを断るのも、マジで疲れるんだよなあ……
性欲が絡んでいるせいで、しつこいしうざいし気持ち悪いし。かといって変に断って、逆上されるのはもっと困るし。
いっそ誰かと付き合っちゃえば、断る手間が省けるのか？
「どうしたらその気になるのか」とか「いくらならヤラせてくれるか」とか、変に食い下がられなくて済むようになるのか？
「じゃあ舐めるだけでもいいから」って、なんで名前も知らないやつのアレを舐めなきゃいけないんだよ!?
お前なら「はいそうですか」って舐めるのかよ!?
ってかビッチだって、ただ舐めるだけって嬉しくないんじゃねーの？　気持ちいいのが好きだからビッチなんじゃねーの？
相手のちんこを舐めるだけじゃ、何も気持ちよくないじゃんか。
――あー、もう、ほんとめんどくせー。
そんな内心を遠くに羽ばたかせながら、日差しが降り注ぐ中庭を眺める。
春も終わりに近づいた、過ごしやすい最高の季節。
食堂と校舎の間にあって、爽やかな風が吹き抜けていくこの場所は、学生たちの憩いの場だ。
青々とした芝生にも木陰に置かれたベンチにもぽつぽつと人が座っていて、おれたちに好奇の目を

向けている。
……なんでこんな気持ちのいい日に、こんなに晴れた空の下で、男に粘られているんだか。
ヤるとかヤらないとか舐めろとか舐めないとか、話すような場所じゃないと思うんだけど。
大学に入って一年ちょっとで、どれだけこんなことがあったっけ？
……数えるのもメンドいくらいとしか覚えていない。あやうく襲われかけたことだって、一度や二度じゃない。
マジでいつまで続くんだ、これ。
ため息をなんとか押し殺しつつ、遠くの緑を眺めていると、視界に大きな影が割り込んだ。
「振られたならどいてくれないか」
おお、救世主。
こっちに背を向けているから誰かはわからないけど、見上げるくらいにでかい男だ。低く響くようないい声をしていて、静かな口調なのに迫力がある。
でも、いったいどんな表情をしているのか。
さっきまで強気だった先輩が顔を見た瞬間たじたじになって、気まずそうに目を逸らしている。
おれに「気が向いたらいつでも言え」と言い捨てて、逃げるように去っていく。
――気なんか一生向かねーわ、ばーか。万が一すげーヤリたくなっても、お前にだけはぜってー言わねー！
走り去る背中に内心でべーっと舌を出してから、改めて男に目を向けた。

すっげー、でけー。
ようやくこっちを振り向いたのは、身長が百九十センチ近くありそうな、筋肉質で強面の男。
おれだって一応百七十はあるのに、首を動かさなきゃ顔が見えない。
でもそこにいたのは意外なことに、おれでも知っている学内の有名人だった。
この体格で目立たないほうが無理だろうけど、柔道の試合中の鋭い視線がカッコいいとか、男の中の男だとか騒がれていて、『男が選ぶ！　抱かれたい男ランキング』で栄えある一位に選ばれていたはず。
……男なのに抱かれたいってなんなんだろうな。おれに聞くな。
ちなみにおれは『男が選ぶ！　抱きたい男ランキング』のほうの何位かに入っているらしい。
『いわずと知れたビッチくん！　その色香に惹き込まれずにいられない!?』なんていういやーな煽り文句がついていたとかなんとか聞いた。
くそ、どうせ選ばれるなら、おれも抱かれたい男のほうがよかった。
この男みたいな硬派な顔つきで、肌もこんなふうに健康的に焼けていて、筋肉なんて鎧みたいで。
さらにいうと性格も、他称ビッチを助けちゃうくらいの男前？
くっそ、腹立つ。憧れる。
こういう男だったらきっと、変な噂とは無縁なんだろう。
軽薄な誘いも真剣な告白もバッサバッサと断るから、難攻不落って言われているらしいし、その硬派な言動からどんどんファンが増えているらしい。

歩いていただけでヤらせろって迫られるおれとは大違いだ。
えーっと、名前は……篠田、だったっけ？
「サンキュー篠田、助かった」
こいつが割り込んでくれなかったら、あとどれくらい粘られていたか。下手すると昼飯を食いっぱぐれることになっていたかも。
改めて感謝しつつ篠田にへらりと笑いかけると、その眉根がぐっと寄せられた。
む、なんだよ。
篠田と違ってビッチとかチャラいとかさんざんな言われようだけど、おれだってお礼くらい普通に言うよ。
「相原、付き合ってくれないか」
「いいよ。どこに行けばいい？　見ての通りひ弱だけど、役に立つかな？」
くてんと首を傾げると、篠田がまたぐぐっと眉間に皺を寄せた。
なんだろ、この顔。怒ってるのか？
やたらと険しくて迫力もすごいけど、おれなんか変なこと言ったっけ？
助けた代わりに、何か手伝ってほしいことがあるんだろ？
あんまり体力に自信はないものの一応これでも男だし、かさばるものを運ぶくらいならいけるって。
重すぎたらすぐギブアップするかもしれないけど、そのときはそのとき。人を呼んだり台車を借

りたり、パシリとしてなら役に立てるって。
……で、話の続きは？
おれはどこに行って何を手伝えばいいんだ？
不自然に続いた沈黙にもう一度首を傾げた瞬間、篠田にがっと肩を掴まれた。
えーと、痛いんだけど、顔怖いんだけど、何？
「同行ではなく、交際のほうだ」
「こうさい？　……交際？　おれと？　なんで？」
「好きだからだ」
「はあ」
いや、気の抜けた返事とか言うなよ。
普通こうなるだろ。
常時五股と噂される他称ビッチに、真剣に交際を申し込むやつがいると思うか？
思わねーだろ？
それも「ちょっと付き合っちゃう？」みたいなかるーい感じの告白じゃなくて、緊張感ただよう真剣な告白。
「ちょっとちんこ突っ込んでいい？」とかならもう言われ慣れたけど、「好きだから付き合ってくれないか」なんて、マジで一度も言われたことねーよ？
こんな告白を受けるなんて、今まで考えたことすらねーよ？

しかも。しかもだ。
目の前にいるのは、ふわふわしたかわいい女の子でも、手当たり次第に声を掛けまくるチャラ男でもなく、硬派を絵に描いたような男なんだぜ？
こんなん、ぽかーんとしちゃって当然だろ。
「えーと、どっきり？」
「違う。急に言われても困るだろうが、友人から始めてくれないか」
やべえ。頭が混乱しててわけわかんねー。
付き合ってっていうのは同行じゃなくて交際のことで、どっきりでもなくて、友人から始めてくれないかって。
これってもしかして、もしかしなくても、告白っていうやつだよな？
他称ビッチが、この見るからに硬派な男に、告白されているんだよな？
――なんでこんな、男の中の男みたいなやつに告白されてんの？
そりゃ女の子に言い寄られるより、男に迫られるほうが圧倒的に多いけど。
「とりあえず試しに一回ヤッとく？」みたいなノリで声掛けられるし、いまさら男ってだけでびっくりはしないけど。
え、どっきりじゃなかったら夢かなんか？
実は心のどこかに、そんな願望を持っていたとか？
いや、でも、ぎりぎりと肩に食い込む指が痛いしなあ。

「……あー、ええっと、うーん、と？　と、友達からなら？」
こら！　そこ！　流されやすいとか言うな！
こんなん、これしか言えねーだろ！
顔が強張りまくっているせいですげー怖い顔になっちゃってるけど、眼光鋭くおれを射抜く瞳は、かなり必死な感じに見えるし。
話したことはないけど、いいやつそうだし。
何より、『緊張してます！』ってでかでかと顔に書いた相手に「友人から」って頼まれて、冷たく断るなんてさすがにひどい……よな？
だよな？
誰かそうだと言ってくれ。
なんとなく間違えたような気がしなくもないけど、こんなにも真剣に告白されたのは生まれて初めてだ。
その相手がおれよりゴツい男だっていうのは、まぁちょっと思うところもなくはないけど、真摯な想いを向けられるのは嬉しい……かもしれない。
と、思うことにしよう。そうしよう。
強張った顔から一転、はにかんだように笑った男に笑い返しつつ、ほんの少しだけ打算が働いた。
これで変な誘いも減るんじゃないか？　と。

◇　◆　◇

結論。減った。
超減った。
むしろなくなった。
おれと篠田は清く正しく友達になっただけなんだけど、なんとこの男、それを告白してくる人に正直に伝えているらしい。
『相原に真剣に交際を申し込んで、今は友人から始めてもらっているところだ』って。まあ、何も間違ってはいないんだけどさ。
難攻不落と名高い篠田が他称ビッチに告白したなんて、学内トップニュース待ったなしなわけで。
結果としてその噂は光の速さで大学中を駆けめぐって、数日経つ頃には『二人は付き合っている。ヤリまくっている。ビッチが巨根に夢中になって、とうとうちんこを一本に絞った』なんていう尾ひれまでついていた。
何度も言うが、おれはまったくの清い身体だ。
ちんこを一本に絞るも何も、そもそも自分のしか知らないし、自分のだけで充分だ。
篠田のちんこにも興味はないし、連れションさえもしたことないから、あいつが巨根かどうかも知らない。
そんな篠田との関係を一言で言えば、仲のいいダチ。

これに尽きる。
例の告白からしばらくは『友達って何すんだ？　おれと篠田の共通点なんてあるか？』とか思っていたけど、完全に無駄な心配だった。
柔道部と無所属、理系と文系。趣味は違うし、講義だって大教室でやるやつがいくつかかぶっているだけ。予想通り共通点も接点もほとんどないし、真面目な篠田といい加減なおれとは、性格だって全然違う。
でも、こんなに真逆なのに、一緒にいるのは悪くない。
というか、楽しい。
ウマが合うってこういうことなのかな？
篠田と遊ぶようになって、世界が広がった――って言うとちょっと大げさだけど、そう感じることも少なくない。
休日の過ごし方がお互いに全然違うから、遊ぶときは互いのやりたいことを交互にやる。
おれの提案で古着屋やセレクトショップをブラついた翌週は、篠田に誘われて山に登るっていう感じだ。
山に登ったのなんて遠足のとき以来だったし、道中はしんどくてへこたれそうになったけど、頂上からの景色は最高だった。
「休みのたびにおれと遊んでるけど、他のダチとは遊ばなくていーの？」
「問題ない。……相原は、その、いいのか？」

「全然おっけー」
誰とでも気軽に話すから顔見知りは多いけど、ダチと呼べるようなやつはかなり少ない。
友人関係は広く浅く、調子は合わせても心は開かず。男女問わずそこそこ仲良く話しながらも、深入りはしないように気をつけている。
それでも痴話喧嘩に巻き込まれるし、彼女持ちの男にヤろうぜって誘われるから、意味あんのかって感じだけどさ。
ダチだと思っていた相手に襲われそうになるよりは、まだ傷が浅いような気がするんだよな。
――だから、篠田といると楽なのかな。
篠田は見た目通りに硬派で真面目で、男の中の男って言われるようなやつだ。
他称ビッチが相手でも軽々しく『ヤろうぜ』なんて言ってこないし、痴話喧嘩うんぬんももちろんない。
ビッチに取られそうになって焦ったのか、告白される回数が増えたみたいだけど、期待も持たせずすっぱり断っているみたいだし。そのときにおれのことを悪く言われたら『俺が一方的に想いを寄せているだけだから、相原を悪く言わないでほしい』ってかばってくれているらしい。
中庭で偶然その場面に出くわしたときは、恥ずかしいわ、いたたまれないわで、全力で逃げた。
自己新記録が出せそうな速さだった。
篠田の硬派エピソードを語り出せばきりがないけど、個人的にツボなのが、おれとの連れションを避けているっぽいこと。

はっきりと言われてはいないものの、どうも『告白してきた相手とトイレに行くのは、相原が落ち着かないだろう』とか思っていそうなんだよな。
用を足したおれが戻ってくるのを待ってから、篠田もトイレに行くことがあるし。むこうが気を回しているんじゃなければ、この数ヶ月ほぼ毎日会っているのに、一度もトイレがかぶらないなんてないと思う。
とにかく篠田はいいやつだ。
あの真剣すぎる告白から始まった関係だから、普通の友達とはちょっと違う。
たまにおれのことを遠くから見つめていたりするし、何気ないときにむずむずするような視線を向けられたりもする。
おれの肩にゴミがついていたときも触れるのをためらっていたし、転びかけて支えてもらったときだって、慌てて手を離して謝られた。
なんでかはまったくわからないけど、篠田は本当におれのことが好きらしい。
それはこの数ヶ月で、充分すぎるくらいに感じている。
――でも、それが嫌だとは、不思議とまったく思わないんだよな。
肩に手を置かれただけでぞわっとくるやつもいるのに、篠田だと嫌じゃないのはなんでなんだろ。
首をひねって考えてみてもよくわからなくて、まあいいか、と諦めた。

◇ ◆ ◇

遊ぶ約束をした日に待ち合わせ場所に向かうと、必ず篠田が先にいる。
おれだって十五分前には着くようにしているのに、いったいどれだけ早く来ているんだろうか。
身長のせいか体格のせいか、シンプルな装いなのに目立つ男だ。
スマホにかじりつくように背を丸めている人が多い中で、一人だけスマホを触らずに、ぴんと背筋を伸ばしている。
周囲の人の視線を集めていても気にした素振りが少しもないのは、さすがというかなんというか。
篠田のことを知れば知るほど、かっけぇなぁ、という思いが強くなっていく。
「よっ、お待たせー」
だいぶ前からおれを見つけていた篠田に近寄り手を上げると、その目がわずかに細められた。
どことなく、眩しいものを見るような視線だ。
篠田に見つめられるとうなじのあたりがそわそわして、くすぐったいような気持ちになる。
嫌な感じじゃないんだけど、少し気恥ずかしいというか、落ち着かないというか。
よくわからない感覚をへらりと笑って誤魔化しながら今日の目的地を聞くと、意外な言葉が返ってきた。
「少し遠いが、郊外にあるゲームセンターはどうだ？」
「えっ、篠田もゲーセンとか行くの？」
「普通に行くが……相原は俺をなんだと思っている？」

何って……なんだろう……武士？
今まで篠田の提案で行ったのは、山と釣り堀とでっかい図書館。ＳＮＳ映えとはまったくの無縁で、大学生が行くにしては渋いところばかりだ。
山は初心者向けでなんにもなくて、本当に登って帰ってくるだけだったけど、澄んだ空気が気持ちよかった。
釣りは餌にするうにょうにょ動く虫がマジで無理だったけど、魚が釣れると楽しかった。あと、塩を振って焼いただけなのに、死ぬほど美味しくてびっくりした。
遠い街にあるでっかい図書館は、おれの知っているそれとはいろいろ違って……なんて言ったらいいのかわかんないけど、小難しい本で勉強させられるところじゃなくて、面白い展示で興味が引かれるところ、みたいな。
本を手に取ってみたくなる工夫がたくさんあって、落ち着いて読める場所も作られていて、気づいたら何時間も経っていて驚いた。
どこも篠田に誘われなかったら、たぶん行くことはなかったと思う。
それでもいつも想像以上の楽しさが待っているから、篠田プロデュースで遊ぶ日を、結構楽しみにしているんだけど……ゲーセンはなんか、普通すぎて篠田っぽくないような。ミスマッチ感が否めないような。
男子大学生の遊ぶ場所としては何もおかしくないはずなのに、篠田がゲーセンにって思うと意外性しかない。

寺で座禅を組もうって言われたほうが篠田っぽい。
それか柔道の一日体験とか。そんな体験イベントがあるのかどうかも知らないけど。
「なんだろ、なんか、渋かっけぇって感じ？　座禅組んでそう」
「それは、褒めているのか……？」
「すっげぇ褒めてる！」
硬派とか、渋いとか、カッコいいとか、言われてみたい言葉ランキングの上位に入る。
確実に入る。
おれがよく言われるのは、軽い、チャラい、エロいとかそんなんばっかだし。『誘ったらワンチャンヤれそう』とか『相原なら男でも全然いける』とか、マジでまったく褒めてねえし。
自分で言ってて悲しくなってきた。
いまいち納得いかない顔で首をひねっている篠田を見上げて、まじまじとその全身を観察する。
太い首に、太い腕。見上げるほどの身長に、男らしく整った顔立ち。
考えごとをしているときに眉間に寄る皺も、意思の強さを示す凛々しい眉も、引き結ばれた唇も、カッコいいとしか言いようがない。
まさに、おれがなりたかった男そのものって感じだ。
うらやましい。
篠田のマネをして眉間にぐっと力を入れて、高いところにある瞳をのぞき込む。
こうすればおれも少しは渋い雰囲気が……出せ、ては、いない、のか？

篠田の眉間の皺が深くなって、表情がぐっと険しくなる。
なのに目尻だけはほんのりと赤くて……これはどういう感情なんだ？
怒っているわけではなさそうだけど。
わっかんないなー、と首を傾げて、向かう先に視線を移す。
休日で混み合う駅構内。
行き交う人々が向けてくる視線が鬱陶しいけど、篠田との初ゲーセンは楽しみだった。

◇　◆　◇

篠田が連れていってくれた郊外のゲームセンターは、他のゲーセンと同列に並べていいのかと悩むようなでかさだった。
同じ館内には銭湯や映画館、ボーリング場まであるらしいし、レジャー施設と呼んでもいいのかもしれない。
あいにく今は観たいものがなかったけど、いつかまた映画を見に来るのも楽しそうだ。
心置きなく遊ぶために、ちゃんとバイト代を貯めておこう。
初夏とは思えない強い日差しから逃げるように、ゲーセンの自動ドアを二人でくぐる。
クレーンゲームの並ぶ通路を冷やかしながら通りすぎ、両替機でお金を崩して、対戦型のゲームのほうへ。

音ゲーはおれのほうが得意だったけど、シューティングゲームでは篠田に一歩及ばなかった――と言うと互角に戦ったみたいだけど、いい勝負ができたのはその二つだけ。
バスケのゲームとかパンチングマシンとかホッケーとか、身体を使うゲームはどれも勝負にならなくて、さすが体育会系と拍手するしかなかった。
そうしていい感じに汗をかいたところで、休憩を兼ねてメダルゲームへ。
難しい操作がないやつをだべりながらダラダラ続けるだけだけど、篠田とやると不思議と楽しい。
おれがどうでもいいことをあれこれ話して、無口な篠田が相槌を打つ感じなのに、ときどきぽろっと漏らす言葉が的を射ていて面白いんだよな。
ふいに落ちる沈黙さえも心地よいし、知らないやつに声を掛けられることもまったくない。
篠田自身も、あの告白以降は本当にただの友達として過ごしてくれていて、こんなにも居心地がよくていいのかと思ってしまうくらいだ。
サムライには下心なんてないのかもしれない。
「お互いに結構増えちゃったけど、このメダルどうする？　預けたりできるのか？」
「期限付きで預けることもできるし、併設のバッティングセンターでも使えると書いてあるな」
「ほうほう？」
メダルを交換したときに渡されたチラシを篠田がさっと取り出して、おれは横からのぞき込む。
遊ぶ時間はまだまだあるし、入ってきたのとは違う出口から出たら、バッティングセンターはすぐ目の前だ。

ずっと座っていて疲れた身体を動かすのは、なかなか気持ちよさそうな気がする。
ちらっと篠田を見上げると、どうやら同じことを思っていたらしい。
一見すると無表情にしか見えないけど、目が心なしか輝いている。
おれと目が合うといつもやんわりと細められるそれは、今日も優しい色をしていた。
「……行くか？」
「おう！」
照れを誤魔化すために勢いよく返し、篠田と連れ立ってゲーセンを出た。
バッティングセンターなんて何年ぶりだろう。

休日なこともあってか、バッティングセンターはなかなか混んでいた。
並びはしないけど空きもない、っていうくらいの混み具合だ。
ゲーセンついでに寄る人が多いからか、客層はほとんどが同年代。メダル分を使い切るとさくさく帰っていく人がほとんどのため、回転は早い。
考えることはみんな同じだなあと思いながら、中級のブースを確保する。
並びで二つ取るのはさすがに無理だし、別行動もつまらないから、篠田と交互に使うことにした。
「せっかくだから、勝負しよーぜ！　漢気勝負！」
「お互い二十球二セットか、悪くないな。何を賭ける？」
「そこの自販機でジュース一本！」

「いいな」という篠田の頷きににっと笑い返して、七分袖のカーディガンを脱ぐ。髪は簡単にゴムでまとめて、薄手のチノパンを膝下までまくった。
これで準備オッケーだ。
勝ったほうが負けたほうに奢る漢気勝負だけど、もちろん負けるつもりなんてない。
ジャンケンに勝って先攻を選び、貸し出しのバットを手に取った。
ホームベースの横にスタンバイして一球目。速さが掴めず見事に空振り。
気を取り直しての二球目は、かすっただけで前に飛ばず。
三球目でやっと前に転がり、続けるうちに少しずつ飛ぶようにもなってきて、ときどき芯を食ったときのいい音が響いたりもして……やっと楽しくなってきたのに、ちょうどそこで球が終わった。
ちぇー、いいとこだったのに。
でも二十球だとそんなもんか。
待っていた篠田と交代して、後方にあるベンチに座る。
緑のネットの向こう側で足元をならす篠田を眺めながら、熱を持った手をこすった。
無地の黒のカットソーに、無骨な印象のカーゴパンツ。ごくシンプルな格好をしているのにサマになるのは、篠田の姿勢がいいからなのか。
それとも、あの惚れ惚れするような筋肉のなせる業なんだろうか。
くっきりと筋が浮き上がる二の腕と、服越しでもわかる背中の筋肉――えーと、上腕二頭筋と広背筋だっけ。なんかそんな名前だったはず。

軽く素振りしてからバットを構えた姿は完全に慣れている人のそれで、運動部に戦いを挑んだことをちょっと後悔した。
自慢じゃないけど、おれは万年帰宅部だ。
身体を動かすのが好きとか嫌いとかそれ以前に、どこかに所属するのが向いていない。
人間関係でぐちゃぐちゃするのが嫌だし、サークルクラッシャーなんて呼ばれたくないし。
無関係な相手からの誘いでもかわすのが大変なのに、上下関係なんてできたらどうなることか。
童貞も処女も一瞬で失う羽目になるんじゃないか？
今は篠田のおかげで変に迫られることがなくなったから、できれば一生このままでいたい。
ねっとりと舐め回すような視線とか、下心満載の猫なで声とか、背中がぞわぞわして気持ち悪いんだよな。
「ねえ君かわいいね、こういうところ初めて？」
ほらほら、これこれ。
こういうやつ、マジで鳥肌モンなんだけど。
近くで聞こえた声にさりげなく目を向けると、声の主は数歩先で、誰かを囲むように立っていた。
大学生っぽい男二人だ。
そいつらに囲まれているのは、帽子をかぶった女の子か。女の子の連れは——隣のバッターボックスにいるあの子かな。どことなく似ているから姉妹かも。
きっとこいつら『男二人と女二人でちょうどいいじゃん』とか思って声を掛けたんだろうなー。

ナンパが悪いとは言わないけど、こんなところで声を掛けるのはどうなんだろう。
一つのボックスを交互に使うなら、絶対に一人で待つ時間ができてしまうし、そこを男に囲まれたら怖いはず。
プレイ中の子は今まさにバットを振っている最中で、すぐに駆けつけるのは難しい。バッティングセンター特有の喧騒で、もしかしたら気づいてもいないかもしれない。
どう考えても、ナンパにいいタイミングではないよなあ。
せめてボールを打ち終わるまで待って、彼女たちが二人でいるときに声を掛けるとか。囲む形にならないように、一人が代表して誘うとか。もうちょっとやりようがあると思うんだよな。
まあどんなやり方でも、結局ナンパはナンパなんだけどさ。
断られても食い下がってしつこく迫るの、マジで男としてどうかと思うよ。
その子、どう見ても嫌がってんじゃん。
どうしようかな、とほんのちょっとだけ考えて、近くにあったバットを倒す。
金属製で軽いそれは、ベンチに当たって派手な音を立てて床に落ちた。
突然の大きな音に驚いて、周囲の視線が一気に集まる。
その中にナンパ男たちと女の子のものもちゃんとあって、心の中でにやりと笑った。
気を引くのには成功したみたいだ。
「わりわり、もしかして邪魔した？　ごめんごめん、どうぞ続けて？」
「あ？」

「暇だし見物させてもらうけど、マジ気にしなくていーから！　しつこい男の生態が気になるだけだから！」
「あぁ？　なんだテメー」
なんだってそりゃ、たまたま近くにいた第三者だけど？
もうちょい付け加えるなら、しつこいナンパ男が二人がかりで女の子を壁際に追い詰めている、この状況にドン引きしている第三者だけど？
声を掛けられていた女の子は、女性にしては背が高いほうに見えたのに、今は帽子がわずかに見えるだけ。
その子を壁際に追い込むようにして、でかい男二人が立ち塞がっているせいだけど――そうして無理やり囲い込んでいる時点で、穏当なナンパじゃないって気づこうな？
ちょうど視線が集まったことだし、恥ずかしいことをしている自覚を持とうな？
嫌味を込めて敢えてにっこりと笑ってやると、男二人が血相を変えて向かってきた。
あー、しまった、ちょっと煽りすぎたかも。
向こうはでかい男が二人。
対するおれは一人だし、細くて弱くて頼りない。喧嘩になったら勝てるはずがない。
でも、いくらおれがひょろくても非力でも、こういうのを見て見ぬふりしたら男がすたると思うんだよなー。
数発殴られるかもしれないけど、口ン中切れないように歯を食いしばっとくか。

あんまり痛くありませんように。
そんなことを考えながら近づいてくる男の手を見ていると、横からぬっと手が伸びてきた。
ひと目で鍛えているとわかる、血管の浮き出た骨張った手だ。
おれが胸ぐらを掴まれるよりわずかに早く、そのでかい手が男の手首を掴み取る。
「何してる」
「え？　あ、篠田？」
一瞬の攻防に気を取られていて反応が遅れ、間の抜けた顔で篠田を見上げる。
もう打ち終わったのか？　とちらっとバッターボックスを確認すると、ちょうどボールがネットに吸い込まれたところだった。
……まだ終わってないのに、わざわざ加勢に来てくれたのか。
おれがバットを倒した音で、こっちの状況に気がついたのかな。
だとしたら、ちょっと申し訳ないような……でも正直助かったかもしれない。
数発もらう覚悟を決めたとはいえ、痛いのは嫌だし喧嘩も無理だ。
篠田の背に庇われるのは男としてどうなのって思わなくもないけど、穏便に済むならそれが一番。
体格のいい篠田の登場で相手は明らかにひるんでいるし、手首を掴まれているほうは動くこともできていない。
そんなに力は入れていないみたいなのに、はっきりと顔色が悪くなって、完全に腰が引けている。
これならきっと、喧嘩を回避できるんじゃないか？

「えーと、何って、なんだろ……ちょっとした話し合い？」
「胸ぐらを掴まれそうになる話し合いか」
「そっ、そうそう、掴まれそうになっただけ！　セーフセーフ！」
自分で言っといてなんだけど、何がセーフなのかはよくわからない。
これを話し合いって言い張るのは無理があるし、苦しい言い訳だと思う。
でも『しつこく絡まれている女の子を助けようとしたら、逆上した男に殴られそうになりました』なんて言ったら、篠田がどんな反応をするか。
既に雰囲気が怖すぎるし、眉間の皺だって深いのに、もっと怒っちゃうかもしれない。
――庇ってくれた篠田には悪いけど、完全に向こうが悪いってわけでもないしなあ。
そもそも喧嘩になりかけたのは、おれが弱っちいくせに口を出したから。つまりは自業自得ってやつだ。
ひよわなくせにカッコつけてナンパの邪魔をしたあげく、篠田に守ってもらう情けなさだ。
だんだん恥ずかしくなってきた。
「だから、な？　篠田……」
頼む。頼むから深くは聞かないでくれ。
図らずも虎の威を借る狐みたいになっちゃっていたたまれないから、このまま水に流してくれ。
そんな祈りを思いっきり眼力に込めて見つめると、なぜか篠田がうっとひるんだ。
眉間の皺が深くなってまばたきが増えて、ほんのりと目尻が赤くなっているけど、いったいどんな心境なんだ？
隙を見て掴まれた手を振りほどいた男が、舌打ちをして逃げていく。その後ろにいた男も慌てててその背を追いかけていき、バタバタという足音が響く。
二十球を投げ終えたマシンも停止して、静まり返ったその場所に、おれと篠田が残される。
――えーと。
まだ固まったままの篠田と、おれに話しかけようとしている帽子の女の子と、その他大勢のギャラリーたち。
それらに順番に目を向けてから、バット二本をそそくさとしまった。
――うん、逃げよう！
悪いことはしていないものの、騒ぎを起こしたことに変わりはない。
絡まれていた女の子はお礼を言おうとしてくれていたみたいだけど、おれはただ殴られそうになっただけ。
それなのにお礼なんて言われちゃったら、いたたまれないことこの上ない。恥ずかしいなんてもんじゃない。
だからここは逃げるに限る！
「相原⁉」
ぼーっとしていた篠田の手を掴み、人のいないほうに駆けていく。
バッティングセンターを出て、ゲーセンの脇を走り抜け、駅まで行く無料のバスを横目に見なが

ら、誰もいない坂道を下っていく。
吹き抜けていく初夏の風が結んだ髪を揺らしても、どうして走っているのかわからなくなっても、走って走って走り続ける。
足は疲れたし、息はしんどい。
流れる汗は不快だし、ここがどこかもわからない。
でも、篠田とわけもなく走っているこの瞬間が、意味がわからないほど楽しかった。

◇　◆　◇

硬派を絵に描いたような篠田と、ビッチの悪名轟くおれ。
十人いたら十人が振り向くくらいにはアンバランスで、二度見されたり笑われたり、ミスマッチと言われることの多かったおれたちだけど、数ヶ月もするとみんな慣れた。
学部も違うし講義もほとんどかぶっていないのに、暇を見つけては一緒にいるからだろうか。
「あれ？　相原、今日は彼氏いねーの？」と聞かれて「彼氏じゃねーけど、篠田は部活」と答える。
そんなやり取りが結構増えた。
似たようなやり取りを篠田も誰かとしているんだろうか？
清く正しいお友達から始めた篠田との関係は、今では親友と言っても差し支えない。
遊んで、遊んで、たまにそれぞれのレポートをやって、遊んで、遊んで……まあ八割くらい遊んでばっかだけど、大学生なんてそんなもんだ。
真面目な篠田のおかげで二割も勉強するようになったから、おれとしてはむしろプラス。
定期テストが近づいた今は、一緒に課題をやったり勉強したり、学生の本分に励んでいる。
取っている講義が違うから篠田に教えてもらうことはできないけど、同じ空間に勉強しているやつがいると捗るよな。
テストが終わったら夏休みだし、単位のために補講を受けるなんて死んでも嫌だし、なんとかして無事に乗り切らねーと。
せっかくの長い休みは、単位やレポートのことなんて考えずに、スッキリした気持ちで楽しみたい。
篠田といろんなところに行ったり、美味しいものを食べたりしたい。
神様仏様、めちゃめちゃ賢い篠田様。
おれに楽しい夏休みをください。
「よかったら、土曜日うちで勉強しないか？」
「お！　行く行く！　マジ助かる！」
早くも救いの神現る！
土曜日は講義室が開いていないし、この時期の図書館は人だらけだし、家にいたら誘惑に負ける。
かといってカフェやファミレスに連日通えるほどの金はなくて、マジでどうしようかと思っていたから、篠田の提案は最高に助かる。

いやあ、持つべきものはいい友達だね！
にぱっと篠田に笑いかけると、ふいっと目を逸らされた。
む。なんだよ？
ちゃんとマジメに勉強するって。

篠田が住むアパートは、大学からほど近い住宅街の中にあった。
少し古びているけど落ち着いた雰囲気で、下宿学生向けのアパートのはずなのにゴミの一つも落ちていない。
いくつもの選択肢の中からこのアパートを選ぶ人たちは、もしかしてみんな篠田みたいなきっちり真面目タイプなんだろうか。
きょろきょろしながら階段を上り、篠田の部屋の扉をくぐると、狭い玄関にでかい靴が綺麗に並べられていた。
――すげー、篠田っぽい。
先に入った篠田が脱いだ靴をさっとそろえて、奥のほうに進んでいく。
それに慌ててついていくと、入ってすぐのところにちっさいキッチンがある、ちょっと広めのワンルームだった。
畳に着物か柔道着で過ごしていそうなのに、残念ながら普通の部屋だ。
ザ・男って感じのシンプルさで、家具の類も最低限。

強いて言うなら埃一つ落ちていないところが篠田らしいと言えば篠田らしいけど、部屋の特徴を挙げるなら、ベッドがでかいことくらいか？
やっぱりこんだけ背が高いと、普通サイズじゃ収まらないんだろうな。筋肉質だから絶対重いし、安いベッドだと軋みそうな気がする。
さっきもキッチンの吊り戸棚に頭がぶつかりそうだったし、でかいのもいろいろ大変そうだ。
「麦茶でいいか？」
「最高！」
篠田の提案に一も二もなく飛びついて、汗の伝う胸元をぱたぱたと扇ぎながら部屋を眺める。
ベッドが大部分を占めているからソファーはなくて、大きめのロータイプの机が一つあるだけ。
あとは低めの本棚と、服を掛けるスチールラックがあるくらいで、狭さはあまり感じない。
物が少なくて綺麗に整頓されているから、面積以上に広く見えるんだろう。
――これはきっと、ベッドの下だな？
男の勘が告げている。
なんか怪しいにおいがしている。
ベッド下を確認しろって、脳内悪魔が囁いている。
「なーなー、ベッド下のぞいていい？」
「ベッドの下？　別にいいが、何かあるのか？」
麦茶を運んできた篠田にあっさりと頷かれて、あーあハズレかーと肩を落とした。

男ならエロ本とかグラビアとか、やましいものの一つや二つ隠していると思ったんだけど、どうやらベッド下にはないらしい。
……もしかして、持っていないなんてこともあり得るのか？
ネットで適当に探してるとか？　こっそりパソコンに保存してるとか？
うっわ、まったく想像できねー！
手軽だし便利だし隠しやすいし、大半の男はスマホでポチっていると思うけど。実際おれもそうだけど！
勝手なイメージだけど、篠田なら堂々とエロ本を持っていると思っていた。
男らしく「だってこのほうが読みやすいだろう」とか言いながら、来客が来る前には一応目につかないところに隠しとくタイプかと期待していた。
……いやでも、こう見えて実はむっつりパターンも面白いな。
性癖が濃すぎてエロ本なんかじゃ物足りなくて、夜な夜なやばい画像を探してるとか。パソコンに別アカウントでログインすると、肌色な画像ばっかりとか。
漢なのかむっつりなのか。
どっちだ。
どっちなんだ篠田。
――って、違う違う、勉強しに来たんだった。
おれの夏休みがかかっているんだった。

シックなラグの上にあぐらをかいて、いそいそと勉強用具を取り出していく。
レジュメにノート、参考書。筆記用具と細縁眼鏡。
視力はそこまで悪くないし、裸眼でも見えなくはないんだけど、勉強中はあったほうが見やすいからな。
前に大学で眼鏡をかけたときは「ギャップ萌え」とか「ぶっかけたい」とかさんざんな言われようだったから、人前ではしないように気をつけているけど。
眼鏡フェチとは恐ろしいもんだぜ。そんなに眼鏡が大好きなら、自分の眼鏡にぶっかけてろ。
……で？　なんだよ篠田。
なんでガン見してくるんだよ。
どうせ馬鹿に眼鏡は似合わねーよ。
いい加減むくれるぞ、このやろー。
「なんだよ、似合わねーって言いたいのかよ」
「いや、よく似合っている」
いや待て、それもどうなんだ。
やけに見てくるから聞いただけで、別にそんな返しは期待していない。
直球で褒めろなんて言っていない。
ていうか、似合っていると思ったなら、なんでずっと物言いたげな目で見てたんだよ！
眼鏡姿に見惚れていたとでも言うのかよ！

……そんなこと聞いて『そうだ』なんて言われたら、恥ずか死ぬから聞かねーけど。
なんでまだずっとおれのほうを見てるんだよ！
赤くなるからやめろってマジで！
篠田の視線を避けるようにうつむいて、ぶんぶんと首を振って気を逸らす。伸ばしっぱなしの長い髪が頬に当たって、ぱしぱしと軽い音を立てた。
こういうときに顔を隠せるのは、長髪の一つの利点かもしれない。
夏はうなじに張りついて不快だし、風呂上がりに乾かすのもめんどいけど。
髪が細くて柔らかいせいで耳に掛けても落ちてくるから、勉強中もすごく邪魔だけど。
うざったいときは結べばいいし……と自分の手首に目をやって、そのままくるりと目を丸くした。
――あ、しまった、ゴム忘れた。
鞄をごそごそと探してみても、予備はないしピンもない。髪の毛が邪魔だ、どうしよう。
……しゃあない、借りるか。
大学に入ってからはずっとフリーだったらしいし、ヘアピンや髪ゴムは持っていないだろうけど、輪ゴムくらいならきっとあるはず。
集中して頑張らないと単位やばいし、髪の毛が絡まるから嫌だとか言っている場合じゃないよな。
さらば、おれの髪。
二、三本抜けるだろうが許してくれ。
「なあ、ゴムある？」

なーむー、と心の中で手を合わせながら尋ねると、かちんと篠田が固まった。
瞬間凍結されたのか、石化魔法か何かを食らったのか。
ぎゅうっと眉根を寄せたまま真剣な目を向けられて、ぱちぱちとまばたきを繰り返す。
――なんだ？　なんか変なこと言ったか？
輪ゴムとか使わないタイプだった？
あの、顔が超怖いんですけど。
こんな険しい顔なんて、しばらく見てない……というかたぶん、例の告白（？）以来初めてな気がするんだけど。
え、何？　なんかあった？
どうしたんだ？
いきなり変わった空気にぽかーんとアホ面をかましていると、篠田がおれの横に手をついた。
ラグに座っているおれの脚まであと十センチ。
触れはしないけどかなり近いところに迫られて、思わずずりずりと後ずさる。
すぐに背中がベッドに触れたのは、学生向けワンルームの狭さのせいか。
真正面から近づく篠田の、眉間に寄ったふっかい皺。引き結ばれた厚めの唇。強面の強張った顔は迫力がやばい。
えーと。なんだろ、この雰囲気。
なんか緊迫感あるんですけど。

「ない。あるわけない」
「そ、そっかー、ないならないでいいんだけど――」
「よくないだろ！」
え、いや別に、髪がうざいくらい我慢するけど？
そう言おうとしたのに、篠田がぐっと顔を近づけてくるから何も言葉にならなかった。
いつの間にかその両手がおれの顔の横にあって、整った顔が目の前にある。視界のすべてを篠田が占めていて、なんだか閉じ込められているみたいだ。
どこにも触れられてはいないのに、体温が伝わってくるような気がする。
……えーと、これって、何ドンになんの？
後ろはベッドなわけだけど、壁ドンの亜種でいいんですか？
って、そんなこと考えて逃避してる場合じゃないって！
マジやばいって、どうすんの!?
頭の中は大混乱なのに、身体がぴくりとも動いてくれない。なんでかはまったくわかんないけど、視線すらも逸らせない。
篠田の指が、髪に触れた。
耳を掠めて首筋に落ちる指先に、びくりと肩を震わせる。深く皺を刻んだ眉間がさらに近づいて、唇に熱い吐息がかかる。
なんだ、これ。

なんでこんな、近いんだ。
――まるで、キスする寸前みてーな。
そう頭の中で警鐘が鳴っているのに、あと少しで唇が触れてしまいそうなのに、動けない。
ぎらぎらした瞳から目が離せなくて。首筋に優しく添えられた手が、火傷しそうに熱く感じて。
からからに渇いた喉を小さく鳴らすと、篠田の動きがぴたりと止まった。
唇が触れるわずか手前。触れたかと思うくらいぎりぎりのところで鋭く舌打ちをして、触れていた手をきつく握る。
今までとは違う色を瞳に宿して、間近でおれを睨みつけて、低い声を絞り出す。
「過去のことをどうこう言うつもりはない。だが、自分の身体をもっと大事にしろ」
うなるようなその声で、妖しい雰囲気はかき消えた。
なぜか怒っているみたいだけど、いつもの篠田に戻ったみたいだ。
張り詰めていた空気が緩んで呼吸がしやすくなった気がして、へなへなとベッドにもたれかかる。
篠田が触れていた首筋に、まだ体温が残っている。
――熱くて硬くて、でかい手だった。
無意識にそこに手をやって、自分との違いに睫毛を伏せる。
おれの手みたいに小さくもなかったし、冷たくもなかった。指先がほんのちょっとかさついている、男そのものって感じの無骨な手だった。
なのに触られても、これっぽっちも嫌じゃなくて。

首筋にほんのりと残る熱を、指先で探している自分がいて。
——やばい、おれ、もしかしてマジでビッチなの？
人に触られるのは苦手だったはずなのに、嫌どころかむしろ気持ちよくて、ちょっと反応しそうになっちゃって……って、そうじゃない。
自分でも知らなかったビッチの素質にうろたえている場合じゃない。
今考えなきゃいけねーのは、なんで篠田が怒っているのか、だ。
なんでこんなに怒ってんだ？
どうしていきなり、過去のことがどうとか、自分の身体を大事にしろとか言い出したんだ？
わけもなく怒るようなやつじゃないのは、この数ヶ月の付き合いでよくわかっている。
だから絶対に何か理由があるはずなんだけど、いったいなんの話をしていたんだっけ。
えーと、勉強をするために眼鏡を掛けたら、いきなり似合っているとか言われて……そのあとに、ゴムがあるか聞いたんだっけ。
そしたら、篠田がちょっと苛立った感じになって……？
……あ。これ、完全におれがやらかしたやつだな？
そりゃ、他称ビッチが家に来て、いきなり「ゴムある？」なんて聞いてきたら、普通はコンドームのことだと思いますよねー。
完ッ全にえっちのお誘いですよねー。
さらに、ないって言われてからの、「なくてもいいけど」がやばいっすよねー。

ナマOKなのかってなりますよねー。
とんだビッチだなあ、オイ。
——でもこいつは、この流れなのに、これなんだ？
据え膳よろしくビッチが誘ってきているのに、簡単に誘いに乗るんじゃなくて。コンドームをいそいそと出してくるわけでもなくて。
他でもないおれのために、あんな怖い顔をして怒ったんだ。
ちょっと、いや、かなりグラッと来ていたっぽいのに、ギリギリのところで耐えたんだ。
おれの身体を心配して、おれを大切にするために。
過去は気にしないなんて前置きしながらも、うなるようにして叱ったんだ。
——好きな人（？）がヤリまくっていたなんて、嬉しいはずねーのに……
ぐるぐるした思考がそこに至った瞬間、ふはっと笑いがこぼれ落ちた。
一度こぼれたら止まらなくて、あははと笑い続けながら、顔をしかめる篠田を見る。
ふてくされたような顔がめずらしくて、不思議とちょっとかわいく見えて、そのせいで余計に笑えてくる。
めちゃくちゃ怒っているのはわかるのに、楽しくって仕方ない。
——そんな顔すんなよ。だってこんなん、笑うしかないだろ？
腹を抱えて、口を押さえて、それでもどうしても呑み込めなくて、涙目のまま篠田を見上げた。
少し離れていてもはっきりとわかる、でかい男だ。

硬派で男前で、憧れるしかないカッコいいやつ。
それなのに今は眉間に深く皺を寄せて、唇を一文字に引き結んでいる。
据わっているとしか言いようのない目で、笑っているおれを睨んでいる。
――頼むからそんな怒るなって。なんで笑ったか話すからさ。
信じられないと思うけど、実はおれ、童貞で処女なんだって。ビッチとかなんとかひどいあだ名で呼ばれているし、噂はいろいろ流れているけど、こう見えて実は身持ちは固いんだって。
借りようとしたのはただの輪ゴムで、髪を結びたかっただけで、コンドームなんて触ったこともないんだって――これから篠田に打ち明けるから。
だから、篠田も教えてほしい。
とんだビッチだと思っていたくせに、ビッチ萌えでもないくせに、なんでおれのことを好きなのか。
しっかりと話したこともなかったのに、どうしておれに告白してきたのか。
友達になった今もまだ、おれを好きでいてくれるのか。
……そんで、それを聞いたそのあとで、もしもの話を続けよう。
もし、いつか。
これから先のどこかのタイミングで、そっちのゴムを使うなら。
手を繋いでキスをして、友達ではできないことをするんなら。
その相手は、お前がいいな、なーんて思っちゃったんだ――って。

――ほら、こんなの、笑うしかないだろ？

2、他称ビッチ、すれ違う

はいセンセー、質問があります。
かなりいい雰囲気になっていた相手と、ほんとぎりぎりの『もう今日くっついちゃうんじゃね!?』っていうスレスレのところで、いきなり距離ができてしまいました。
こんなとき、どうしたらいいんでしょーか？
「――そんな怒るなって、説明するから。いいか？　まず、ゴムっていうのは、輪ゴムのことだ。髪結ぶやつ忘れたから」
ほら、と髪の毛を耳にかけて、勉強するときのように軽くうつむく。
それだけでさらさらと流れる細い髪に、篠田がぱちりと目をまたたいた。
短髪の篠田にとってはめずらしい光景だからだろうか。
まじまじと注がれる視線を感じながら、落ちかかる髪を乱暴に払った。
「勉強するときはいつも結んでるだろ？　すぐに落ちてくるから邪魔なんだ」
後ろでまとめて片側に寄せても、ふとした拍子に元に戻る柔らかな髪。

ゆるくウェーブしたそれが邪魔で、ふるふると首を横に振ると、ふわりとシャンプーの香りがただよう。
このにおいだけは好きなんだけど、結ぶのも乾かすのもめんどくさい。
セルフカットできるくらいに器用だったら、篠田みたいに短くするのに――と篠田のほうに目を向けると、呆然と固まっている篠田がいた。
「おーい、生きてる？」
まばたきさえ忘れている目を首を傾げてのぞき込むと、篠田がうろたえたように視線を揺らす。
――なんだろこの顔。戸惑い八割、驚き二割？
コンドームじゃなくて髪ゴムの話をしていたってのは、ちゃんと伝わったんだよな？
石化したままの篠田の視線が揺れているし、頭の中で何かぐるぐると考えているらしい。
何を考えているのかはまったく想像もできないけど……まあいいや。とりあえず続きだ。
ゴムの誤解は解けたとして、次に何を話したらいいのやら。
やっぱりまずは、ビッチの誤解を解くところからか。
「ついでに言うと、コンドームなんて見たことも触ったこともない童貞処女だ。男なのに処女ってなんだって感じだけど、まあいわゆる清い身体ってやつ。ビッチとか誰が言い出したのか知らねーけど、否定しても誰も信じないから放置してる」
「意外だろ？」と篠田のほうに目を向けて、そのままくるりと目を丸くする。
ぽっかーん、という音が聞こえてきそうな顔だ。

いつもキリッと凛々しい表情をしているのに、めずらしいなんてもんじゃない。篠田のファンがこれを見たら、五度見不可避なんじゃないだろうか。
うーわ、おもしれー。
人ってびっくりしすぎるとこうなるのか。
呼吸を忘れたっぽいのに口は開けたままで、目をまんまるに見開いて。だけどその目は明らかに何も映し出していなくて……たぶん、脳みそフル回転で何かを考えているんだろうな。
流れまくっているいろんな噂とか、これまでのこととか、おれのさっきの発言とか。ぐーるぐーる思い出してかき混ぜて、頑張って呑み込もうとしているんだろうな。
おもしれー。
「篠田は、信じてくれるか？」
信じてくれるとわかっているのに、わざと聞いて小首を傾げた。
必殺、眼鏡越しの上目遣い、不安げな表情にさらりと揺れる長髪を添えて！
って、我ながらあざといけど、うるせー照れ隠しだよ、言わせんな！
こんなこと打ち明けたの、篠田が初めてなんだって！
「ビッチじゃねーし」って言っただけでも下手な冗談って笑われるのに、マジな否定なんてできるわけないだろ！
しかも。
しかもだ。

篠田ならきっと信じてくれるとは思っていたけど、「嘘だろ？」の一言もなしなんて。ものすごくびっくりしていても、おれの言葉を一ミリも疑うことなく、信じようとしてくれるなんて。
いったいどんな奇跡なんだよ！
嬉しすぎておかしくもなるだろ！

……でも、今になって思い返すと、たぶんこの辺の言動がいけなかったんだろう。
なんつーか、おれもテンパっていた。
どう考えてもおかしかった。
だけど普通そうなるだろ⁉
『友人から始めてくれないか』って篠田に言われてから、ごく普通の友達同士として過ごしてきたはずなのに、触られても全然嫌じゃなかったとか。
いつかコンドームを使うなら篠田とがいいなとか。
それってもうガチで惚れてんじゃん？　マジのやつじゃん？
だって相手、男なんだぜ？
たぶんおれが掘られる側なんだぜ？
そんなんもう、マジの中のマジなやつじゃん。
ついさっきまで、これっぽっちも気づいていなかったけど……おれ、いつの間に恋してたわけ？
篠田のことが好きになっちゃってたわけ？　って振り返ってみるだろ？

確かに硬派なところがいいなーとか、こんな男になれたらなーとか思ってたけど、友達になってまだ数ヶ月だし。
電車でさっと席を譲るところとか、困っている人を助けてそのまま立ち去るところとか、マジで渋かっけぇし憧れるけど。
真面目で優しくてカッコいいくせに、案外不器用でかわいいところもあるんだよなーなんてにやにやしたこともあるけど――って。
ちょっと考えただけでこんなにぽんぽん出てくるなんて、もう明らかに惚れてんじゃん！
昨日今日好きになったわけじゃねーじゃん！
なんで今まで気づかねーんだこの鈍感！
……そんなふうに脳内セルフ突っ込みをしていたおれに、篠田の様子を窺う余裕なんてなくて。
「……っ、すまない」
絞り出したような篠田の声に視線を上げると、そこには真っ青な顔があった。
おれが目を離していた短い間に、いったい何を思ったのか。
蒼白な顔で眉間にぎゅっと皺を寄せて、篠田がそのまま部屋を出ていく。
玄関扉が開いた瞬間だけ蝉の声が大きくなって、扉が閉まる音とともにまた静かになる。
それをただ呆然と見聞きしながら、おれは少しも動けずにいた。
それが二週間前の出来事だった。

大教室の窓から外を眺めて、くるりくるりとペンを回す。
室内は冷房が効きすぎて寒いくらいなのに、窓の外にはぎらついた日差しが降り注いでいる。
その落差があの日とよく似ていて、ため息とともに睫毛を伏せた。
——信じてくれなかった、ってわけじゃ、ないと思うんだけどなあ。
どうしてあの日、篠田はあんなにも青ざめた顔をしていたのか。
なんで戻ってこなかったのか。
……タイミングからして、あの言葉か、仕草か、その両方がダメだったのかなあと想像するしかないけど、結局答えは聞けないままだ。
篠田と会えなくても時は流れて、これが今期のテストの最終科目。
集中できないながらも一応は勉強したものの、成績は、はっきり言ってボロボロだろう。
解答用紙には空欄が目立つし、問題を読んでも内容が頭に入ってこない。
手が止まるとすぐに篠田のことを考えちゃって、ため息なんて一分置きだ。
いい加減周りにも迷惑だと思う。
避けられている、と言い切るには、もともと篠田とは接点がない。
学部は別、かぶっている講義は二つだけで、どっちもテストなしのレポートだけ。
部活だって、篠田は柔道部でおれは無所属。
さらに言えば家の位置も大学を挟んで真逆だから、登下校もかぶらない。
食堂も購買もキャンパス内にいくつもあるし、なんで今まで篠田に会えていたのか不思議になるくらいだ。
——篠田が、会いに来てくれていたんだよなあ。
はあ、とため息をついて、またくるりとペンを回す。
おれなりに、篠田と会うために頑張った。
まずはメッセージを送ろうとして、言葉が出てこなくて何度も閉じて。
やっぱり会って話すしかないと二回会いに行ったのに、残念ながらどちらも空振り。
そうなると三回目の勇気は出てこなくて、こうしてうじうじと解答用紙に向き合っている。
ああ、くそ、もやもやする。
——好きだって言うなら、会いに来いよ。
拗ねた子供のようなことを考えながら、ぎゅっと眉間に皺を寄せた。
全体的に白っぽい解答用紙を提出してすぐ、ペンを放り出して机に突っ伏す。
結び忘れていた髪が横顔をふわりと覆い隠して、むうと唇をとがらせた。
篠田とぎくしゃくしちゃったのは、元はと言えばこの髪のせいだ。
髪が短かったら結ぶ必要もなかったし、ゴムがあるかを篠田に聞いて、誤解を招くこともなかったのに。
人に触られるとぞわぞわするから避けていたけど、そろそろ髪を切りに行くべきか。
「相原、暇なら俺らとどっか行こうぜ。ラブホとかラブホとかラブホとか」

立ち読みサンプルはここまで